

## 桐野三郎さんを偲んで



「炉ばたセイ談会」は作家・歴史家であった故人来院貞子氏（一九三三―二〇一一）が

所属する鹿児島県ペンシルクラブで平成十三年に提唱、同クラブ代表の相星雅子氏ほか数名の会員がこれに賛同、他に新聞・テレビ関係者、高校・大学の教職員ほか地元の元町長などが加わっていたき、入来武家屋敷の囲炉裏辺で「セイ談」を語り合う会としてスタートしました。「セイ談」のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの蒙を啓こうという程度の、堅苦しくない会という意味です。（以上、桐野三郎さんが「炉ばたセイ談」9号に書かれた『炉ばたセイ談の生い立ち』より）

「炉ばたセイ談会」スタート以来代表を務めて来られた桐野三郎さんが平成二十九年二月二十六日に永眠されました。二月二十七日（月）の南日本新聞に掲載された『エッセイストの桐野三郎氏死去』と題する記事を以下に転載させて頂きます。（下）

『新聞や郷土文芸誌などで活躍したエッセイストの桐野三郎（きりの・さぶろう、本名久保四郎Ⅱくぼ・しろう）氏が26日午前0時、間質性肺炎のため、始良市の自宅で死去した。85歳。鹿児島市出身。自宅は始良市平松5122の1。通夜は27日午後7時から、葬儀・告別式は28日午前10時から、始良市西餅田3288、天国葬祭始良みそらホールで仏式で行う。喪主は妻の牧枝（まきえ）さん。

慶応大経済学部卒。山形屋勤務、パブ経営

などを経て文筆活動へ。南日本新聞では、1994〜98年エッセー「はーふたいむ」(全100回)を連載、99年新春文芸の短編小説で入選(1席)したほか、2002〜05年「読者と報道」委員会委員を務めた。鹿児島ペンシルクラブ会員、岩崎育英文化財団理事、炬ばたセイ談会代表。著書に「さらば無頼なる日々」(随筆かごしま社)。

## 桐野三郎さんを偲ぶ

入来院重朝

桐野三郎さんが亡くなって大分たちます。

私は三郎さんと知り合ってそんなに長い年月ではありません。会った時の印象はああさわやかな人だなあでした。つまり私にとって鹿児島に帰ってきて始めて会った知識教養人の

サンプルでした。温厚で全く申し分のない薩摩のヒトでした。

さてお葬式に行つてハタと気付きました。彼は私の知っている桐野三郎さんではありません。久保四郎さんなのでした。私がつっていたのはあくまでも桐野三郎さんです。私は本当の彼をどれだけ知っていたのか。それはわかりません。あくまでも私は桐野三郎さんを思うのです。ああもう一度一緒にビールをのみたいなあとは。(六月五日記)

## シニカル紳士

澁谷 繁樹

文筆通り名の桐野三郎さんよりも本名の久保四郎さんの方がしつくり来るのは、知合ったのが桐野さんとして書き出すのはまだまだ

先の昭和五〇年代になるからだろう。

久保さんは鹿児島市高見馬場のビルでパブを開いていた。名前はマリー。かなり広い洒落た店で、若い層は踊り回ったりもできたし、そろそろ落ち着きたい年代はカウンターで静かに呑んでいた。久保さんの葬儀で顔を合わせた高校の同級生は、四郎さんから男の酒の飲み方を教えてもらったと話していたけれど、当方はシニカルそうな紳士だと敬して近づかない、に徹した。

山形屋東京担当時代に一年の交際費を一晚で使った、自腹を切りまくり膨大な借金をこさえた、噂が耳に入る度におそろおそろ真相はとうかがうと、シブヤチャン、人はとやかく言うイキモノですからね、と穏やかに笑いながらしつかりはぐらかされた。

本当はどうなんです、西の遠い世界で再質問してみるつもりではいるが、フフフと含み

笑いに包まれるだけかもしれない。

## 桐野三郎さんとの7年間

中西喜彦

今年の正月、華やかな花の絵と共に、もう少し車椅子の目線から世の中を楽しみたいとの年賀状をいただいた。昨年秋に炉ばたセイ談会で酸素ボンベから吸入器を付けた状態でお会した時は、あまり食事も取られなかったので心配していた。年賀状で生への期待の文章を拝見して凄く嬉しい気持ちになったことを思い出す。しかし、その約二カ月後に計報に接しがつかりした。

桐野さんに最初にお会いしたのは故貞子さんから誘われて出席した百田陽一さんの送別会の時である。その時、今から少し入院する

ような挨拶をしておられた。以来色々病気を抱えながら飲み会では老いを感じさせないお元気な姿に接してきた。

主として炉ばたセイ談誌の編集方針でご指導頂いたが、御自身も毎年長編の投稿を続けられた。四百字詰め原稿用紙約四十枚に丁寧に手書きで書かれ一つの芸術作品の趣があった。当初数年間筆者の仕事はそれをパソコンに打込むことであつたが豊富な語彙に大変勉強になった。やり取りの中で「遅筆のものも怠けているのではなく色々と推敲しているのです」とのことに妙に納得した経験がある。

葬儀で拝見した遺影は壮年期のもので筆者の知らない久保さんだった。二中の同級生の弔辞では、亡くなられる一ヶ月程前にも最後の同窓会に、酸素ボンベを抱えて車椅子で、天文館の会場に出て来られたらしい。まさに生涯現役の壮絶な生き様をご教授頂き出会

に感謝している。心からなるご冥福をお祈りする次第です。  
(炉ばたセイ談編集担当)

## ワイングラスのイラスト

下土橋 渡

平成23年秋発行の第7号以来編集担当をさせてもらっていると、桐野三郎さんから毎年手書きの原稿が届きます。味わいのある文字で丁寧に書かれた直筆の原稿に直に触れられ、誰よりも一番先に読ませて頂けるわけです。大変恐縮しながらも光栄に感じたものです。

まず文章をパソコンに入力します。入力が終わると内容に沿ったイラストを挿入しながらページを整えていきます。イラストは出しやばつてはいけません。付かず離れずの塩梅で

適宜挿入していきます。

桐野三郎さんのエッセイには、ワイングラス、カクテルグラス、徳利、お猪口、ワインボトル、摩天楼、ピアニスト、ダンスサーシルエット、ゴンドラといったようなイラストをたくさん使いました。会員になっている有料の素材サイトにはいろいろなイラストが準備されていて、エッセイの内容にピッタリのイラストが見つかる嬉しかったものです。

そうした楽しみや、桐野三郎さんから届いた、四百字詰め原稿用紙が30枚も40枚も入ったずっしりと重い封筒から束のような原稿をおもむろに取り出す感触はもう味わえませんが、今後の『炉ばたセイ談』の更なる発展に向けて、微力ながら頑張っ行ってきたいと思えます。桐野三郎さん、ありがとうございます。心よりご冥福をお祈り致します。

(炉ばたセイ談編集担当)



在りし日の桐野三郎さん。庵主・入来院重朝さん（右）と談笑中の桐野三郎さん（平成27年9月重朝さん宅で中西喜彦さん撮影）